

良品の安定生産・計画出荷を追及 ～シンビジウム専作で優良経営～

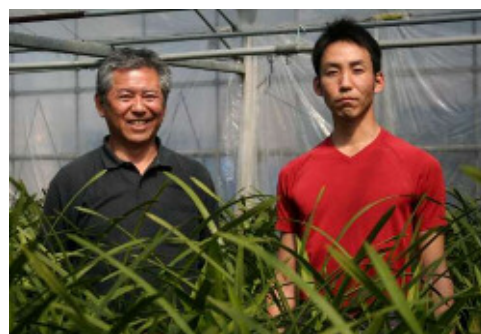
豊田市 倉橋達己さん
花き（洋ラン）

【平成 30 年 4 月 20 日掲載】

豊田市でシンビジウムを専作する倉橋園芸の倉橋達己さんをご紹介します。倉橋園芸は、達己さん、妻の由美子さん、息子の幸嗣^{こうじ}さんの3名の家族労力で花きの優良経営を実現しています。

就農5年で経営を任される！

倉橋達己さんは、観葉植物等を生産する農家に生まれ、三重県の農業高校を卒業後、スイスで野菜等の栽培技術を学び、昭和52年に21歳で就農しました。当時は、シンビジウムの栽培を試し始めて3年目で、生産量を増やす最中でした。栽培管理を教えてくれていた父の澄雄さんが昭和57年に市議会議員になったことをきっかけに、達己さんが経営を受け継ぐこととなりました。就農5年目で作業に慣れてきたころだったので、なんとかなるだろうと思っておりましたが、経営主としてすべてを舵取りすることは想像以上に困難でした。花をたくさんつけた商品価値のある株に育てることや、需要の多い年末までに計画どおり出荷することが大変難しく、販売額は下落し続け、このときから良品の安定生産・計画出荷が目標となりました。



倉橋達己さん、右幸嗣さん

栽培技術の確立

昭和50年代は、シンビジウムの国内生産が始まって間もない時期で、生産者も種苗会社も手探りで栽培や育種をしていました。東南アジア原産のシンビジウムを日本の気候で営利生産する技術が未確立な上、苗の供給や植え込み資材のバークの品質も不安定でした。さらに、当時倉橋園芸で栽培していたガラス温室では、生育状況に合わせた環境調節ができないことも栽培が難しい要因の一つでした。

そのような中、地域の洋ラン生産者で「豊田洋らん研究会」を結成し、農業改良普及所（現 農業改良普及課）とともに、ほ場巡回や現地実証を実施し栽培技術を確立していきました。また、年末までに出荷するため、夏場に標高の高い冷涼な場所に鉢を移動して花芽分化を促進する山上げ栽培が始まり、その技術の検討を重ねました。これらの取組や技術改善により安定生産ができるようになりました。

アーチ仕立ての導入で経営安定

平成10年の施設移転に伴い、環境調節のしやすいビニルハウスに建て替えました。作業の効率化



環境調節のしやすいビニルハウス

に重要なポイントとなるベンチを自作するなど、シンビジウム栽培に最適なハウスとしました。

3,600m²の新ハウスで年間1万鉢のシンビジウムの生産が軌道に乗り始めた頃に、アーチ仕立てに出会いました。それまでの一般的なシンビジウムの仕立ては、真っすぐの支柱で花茎を垂直に支えるのに対し、アーチ仕立ては、曲げた針金の支柱に花茎を固定して株の前面に花を配置できるように仕立てます。アーチ仕立てには高い技術が必要であり、アーチ仕立てに向く品種の選定、株を充実させる栽培方法、仕立てる際の技術など様々な課題がありました。倉橋さんは平成14年からアーチ仕立てを開始し、これらの課題を一つ一つ解決して技術を確立していきました。



アーチ仕立てのシンビジウム

この仕立て方法の導入により、倉橋さんの高い技術が評価され、フラワードーム2003・名古屋国際蘭展の商品性の部で第一席となるオーキッド・オブ・ザ・イヤーを受賞するなど、様々な品評会で受賞を重ねました。



株の間隔を広めにとり、株づくりをしっかり行う

良品の安定生産・計画出荷

経営を引き継いだ当時の苦労が倉橋さんの経営の原点となり、「良品の安定生産・計画出荷」をモットーとしています。例えば平成29年作は、春先から1年を通して天候が不安定で、例年ならば株が充実して花芽分化が進む夏～秋の時期に曇雨天が多いなど、栽培の難しい作でした。しかし、倉橋さんは、経験で培った、節目ごとの株のあるべき姿を基準に、その姿と異なる場合の対処法などを実施し、ほぼ例年どおり出荷できました。この「良品の安定生産・計画出荷」は、市場や販売店に浸透しており、安定した価格での販売につながり、経営安定を実現しています。

さらに、平成20年に息子の幸嗣さんが就農してからは、毎年2回、2人で関東まで種苗会社や販売店に行ってシンビジウムの生産や販売の動向を調査し、今後倉橋園芸がどうすれば伸びるのかを議論しています。常に販売のことを念頭に、品種選定、栽培方法や売り込み方法を検討し、経営判断をしていると話してくれました。

これからもシンビジウム生産を続けていく

現在は達己さんと幸嗣さんが分担して栽培管理を行い、妻の由美子さんがパート従業員の対応や出荷調整の中核として働いています。幸嗣さんは、海外での2年間の研修や全国農業青年クラブ連絡協議会の会長を務めて視野を広めたり、豊田洋らん研究会の研究活動で技術研鑽に積極的に取り組むなど、将来有望な後継者です。近い将来、達己さんは経営を幸嗣さんに移譲して、夫婦は生涯現役で働くつもりです。幸嗣さんは花き業界が厳しいと言われる中でも「シンビジウム生産を続けて、父から教えてもらった『温室では農家、家では経営』(※)ができるようになりたい。」と抱負を語ってくださいました。

※温室で植物の観察をしっかりとできる農家（技術者）と、経営の判断ができる経営者の両方が重要という意味